

「多摩川水系河川整備計画【大臣管理区間編】（変更原案）」に対する公聴会

日 時：令和 7 年 8 月 4 日（月） 15：50～16：10

場 所：立川女性総合センター 5 階 第 3 学習室

発言者：公述人 2

■■■です、よろしくお願いいたします。

流域に暮らす約 414 万人のうちの一人として、今回このように意見を申し上げる機会をいただきまして、心より感謝申し上げます。また、こちら（多摩川水系河川整備計画パンフレット）の資料なのですが、ルビも振ってあって、とても分かりやすい資料になっています。私、教育支援に携わっておりますので、生徒などにも聞いて聞かせる資料にしては素晴らしいものだと思います。作っていただいた方、本当にどうもありがとうございました。

今回の公聴会は、今後 30 年にわたり多摩川の川づくりの方向性を示す重要な機会だと理解しております。私は多摩川上流域、小河内ダムから羽村取水堰までの区間について、日ごろから感じている課題をお話しさせていただきます。

こちらの図表なのですが、この該当地域の地図になります。御覧の通り、発電所が 4 カ所、取水堰が 2 カ所、そして多くの公共施設が集中しております。この多摩川水系は、荒川水系、利根川水系とともに、貴重な東京都民の飲料水になっているところでもあります、この治水と水の利用が地域住民にとって大きな障害になっているのも現実です。

まず、白丸ダムで行われている毎日の観光放流について触れさせていただきます。今回こちら、万年橋までというお話も先ほどからあるのですが、川はつながっておりまして、大臣管理区域には相当しておりますので、今回お話をさせていただきたいと思います。

こちらの白丸ダムで毎日行われている観光放流です。この観光放流は、溪谷の景観保全と観光施設維持を目的として実施されておりますが、時間毎によって水位が大きく変動します。特に午前中は、前日まで水があった場所が両側黒く縁どられているようになっておりまして、景観を損なうばかりか、水位は約 40cm も上昇します。このため川岸に置かれていたサンダルですとか、浮き輪などが流されるような事故も日常的に起きております。

放流が始まりますと、岩が見えなくなるほど水位が上昇しまして、水生生物にとっても、半日ごとに環境が激変しますので、非常に不安定な状況が毎日繰り返されております。この観光放流は、昭和 34 年から約 66 年間続けられておりまして、見直しが一切されておられません。近年では、河川管理者からも見直しを求める声が上がっておりますので、環境省や東京都、関係自治体による再検討が必要だと、住民も強く感じております。この河川整備計画を定期的に見直されているのと同じように、この観光放流も、環境に配慮した検討が必要だと思います。

次に、先ほどもお話がありましたが、台風 19 号の上流域の被害についてです。この時、御岳にあります御岳小橋は、橋そのものが流されました。多くの施設が毎秒 100 トンを超える放流と流砂により、甚大な被害を受けました。復旧には長い時間と労力がかかりましたが、こうした被害の度に小河内ダムからは標準貯水率を維持するための大量放水が行われております。

ここまでは理解できるのです。しかし、問題はその後です。

台風が去って天候が回復しても、羽村取水堰での取水のため、ダムからの大量放水が長期間続

けられている現状があります。羽村取水堰は都民の飲料水の 17%を供給する貴重な取水点にあり、この構造は江戸時代から続く投渡木（なぎ）払い方式という極めて独特なものを使っております。

具体的には堰の一部に丸太を縦横に組み、小枝や砂利を詰めて、ムシロを引いた部分、投渡木（なぎ）と言われているのですが、投渡木（なぎ）と呼ばれる箇所を洪水時には意図的に壊して水を逃がす構造になっています。これは流域の安全に大きく寄与してきました。しかし、同時に再び造成するためには、莫大な費用をその都度投与されています。しかし、一方で投渡木（なぎ）を壊すと堰自体がなくなるため、通常の取水ができなくなります。それを補うために、ダムから毎秒約 40 トンもの水を常に流し続けるという、非効率で環境負荷の高いサイクルが生まれています。

この放流は台風が去った後の晴天の日でも数週間続くことがあります。また、数年前には 30 トン以上の放流が行われている最中に川遊びをしていた児童が流されるという痛ましい事故もありまして、放流と事故の直接的な因果関係は不明ですけれども、毎年のように水難事故が発生している事実は重く受け止めるべきです。

さらに、羽村取水堰の下流には、投渡木（なぎ）払いによって流された土砂や上流から流されてきた土砂が堆積して、地域住民からは河川の氾濫を懸念する声も上がっています。そのため、河道掘削によって生物多様性を保ちつつ、砂利を排出し、大きめの礫だけを残して水生生物が生息しやすい環境を整えることが重要だと考えます。

そして、忘れてはならないのが白丸ダムで 3 年に 1 回行われている抜水点検です。この点検時にはダム湖が干上がりまして、河床が露出します。いつもは一番左側、湖になっているのですが、この抜水点検のときだけは、これが川に変貌します。

露出した河床には、礫の上に泥や腐葉土が何層にも堆積してしまっていて、ミルフィーユ状になっている様子が確認できます。一番右の写真です。これらの堆積物は抜水時に一気に流れ出しまして、上流域全体に被害をもたらしました。これ、珍しい写真なので皆さん見ていただきたいのですが、一番左上、これが通常の状態です。抜水が始まりますと、徐々に水が減っていくのがお分かりいただけますでしょうか。それと同時に、河床にたまった石灰成分を含んだ水が、水が流れるのと同時に、巻き上げられるような状態になっています。そして下段ですね、左側、だんだん茶色く濁ってきておりまして、最終的には真っ茶色な水になります。これが河川に流れます。そうすると、普段川の中に魚が泳いでいるのも目視で確認できるこの川が茶色く濁って白濁します。数週間こういう腐葉土が川全体にまき散らされて、川岸には全部たまって、手ですくうとシルト状の泥が堆積しまして、長靴のようなもので川に入ると、そこから足が抜けられないような状態になります。

これは小河内ダムのすぐ下流にあります日原川の支流と多摩川上流の合流地点で、雨が降るとその都度、このように支流から本流に白濁水が混入してきて、白丸ダムに沈殿する状態です。

近年に日原川支流から多摩川本流にかけて雨が降った時などに、白濁した水が流れ込む現象が頻発しております。その影響で、白丸ダムへの堆積物が本流の水質悪化につながっております。

これは山と川が一体であるという自然の原則を改めて思い起こさせるものです。下流域でいかに整備を進めても、上流から流れ込む濁水によってその努力が損なわれるようであれば、本末転倒となりかねませんので、上流の源流域における土地利用や事業活動に起因する可能性のある濁水の流出についても、関係機関が現地の状況を的確に把握し、必要に応じて適切な対応を講じて

いくことが将来的な河川環境の維持、改善につながることを改めて強調したいと思います。

最後に申し上げたいのは、こうした構造物や交流の歴史的な意義は尊重しつつも、時代に合った合理的かつ環境に優しい整備に転換すべき時期にきているのではないか、ということです。都民の水源を守ることと、上流域の自然、住民の安全、生物多様性を両立させるためには、羽村取水堰の構造の近代化を含めた再設計が必要だと考えています。

少し上流域に、ちょっとスポットをあてた内容になりましたが、我々住民が日頃から懸念していることをこの場でお伝えさせていただきました。ご清聴ありがとうございました。